

近江国筑摩御厨における 自然環境と漁撈活動

湖岸の御厨の環境史

The Natural Environment and Fishing Activities of
Mikuriya in Chikuma, Omi Province :
An Environmental History of Lakeside Mikuriya

佐野静代

はじめに

①筑摩御厨周辺の自然条件

②筑摩御厨の貢進魚類とその生態

③筑摩御厨におけるアユ漁と天野川の流路変遷

④考察—筑摩御厨における贅人の生活形態

おわりに

【論文要旨】

古代の御厨における漁撈活動の実態を解明するためには、「湖沼河海」の各々の御厨を取り巻く自然環境の分析が不可欠である。自然環境の分析には、地形・気候的条件とともに、その上に展開する「生態系」、特に魚類を中心とした生物相の考察が含まれる。魚類の生態と行動（生活史・食性・場所利用など）は、古代にも遡及しうるものであり、当時の地形と漁撈技術段階との照合によって、魚種ごとの捕獲原理や漁獲時期が推定可能となる。このようにして各御厨で行われた漁法が明らかになれば、「湖沼河海」の御厨ごとの漁撈活動と、贅人の生活形態の相違が浮かび上がってくるはずである。

本稿では、古代の琵琶湖に設けられた筑摩御厨を対象として、当時の地形・生息魚種の生態・漁撈技術段階を照合し、その生活実態について検討した。筑摩御厨では、春の産卵期に接岸してくるフナと、春～初夏に琵琶湖から流入河川に遡上してくるアユを漁獲対象としており、贅人の漁撈活動は、地先水面での地引網漁＋上り築漁というきわめて定着的な漁法によっていたことがわかった。御厨現地での生活実態としては、水陸の移行帯において漁撈と農耕が分かちがたく結びついた「漁＋農」複合型の生業形態であったと推定される。琵琶湖岸の古代の御厨においては、漁撈のみに尖鋭化した特権的専業漁民の姿は認めがたく、古代の贅人の生活実態は、網野善彦が提起した「船による移動・遍歴を生活の基本とする海民」像とは、異なるものといえる。生業を指標とする集団の考察には、現地の環境条件との照合が不可欠であり、網野の提起した「非農業民」概念もこのような視点から再検討されるべきと考える。

はじめに

日本古代における御厨とは、畿内及びその周辺に置かれた「天皇・神への贄供進を任務とする地域あるいは官司」を指すものとされる〔梅村 1981〕。御厨に依拠して魚介を貢進し、水面を主たる生活の場としていた人々——贅人の存在につとに着目し、その研究レベルを一気に引き上げたのは網野善彦であった。網野は、天皇の山野河海に対する支配権と結びついた御厨贅人が、やがて中世には水面の自由使用の特権を保証された供御人となっていったことを示した。漁業・水運業・商業等に携わったこれらの人々は、移動・遍歴を基本とする「海民」であり、その生活・生産の様式が農業民とは本来的に異なっているとして、「非農業民」の概念を提起した〔網野 1984〕。

網野の一連の研究によって、古代・中世の御厨の生活についてはかなりの部分まで考察が加えられたといえる。しかしながら、この成果をより深化させるためには、網野〔1984〕の研究では「湖沼河海を問わず」として一括されている「水面」について、「湖沼河海」ごとに異なる環境条件を分析し、そこで営まれる生計活動の実態を取り出すことが必要であると思われる。網野も指摘するごとく、山野河海において行われる生計は自然との関わりを生命線とするがゆえに、自然による制約を大きく受ける。したがって、古代の御厨について理解するためには、それぞれの御厨を取り巻く自然環境の分析が不可欠である。

それでは、現地の生活を規定する自然環境とは、具体的にはいかなるものを指すのであろうか。これまでの歴史地理学的研究では、人間を取り巻く「環境」としては、地質・地形・気候等の自然科学的条件があげられることが多かった。このような傾向は、近年の文献史学の立場からの環境史・環境歴史学においても共通しており、「自然環境」を開発・生産発展の制限要因とみなしたり、あるいは気候変動のようなマクロスケールの枠組みとする研究は数多く見受けられる。

しかし本稿では、人間の原初的な生計活動が、「採集・捕獲」という形で身近な生物資源に向けられることに注意したい。地域に生息する動植物を資源とみなし、それを利用することによって自然との交渉史が始まる。したがって、分析されるべき「自然環境」には、地質等の基盤構造に加えて、その上に展開している生物相、すなわち地域の「生態系」が含まれるはずである。

「人間」と「自然」との関係史とは、「人間による自然条件の克服過程」といった両者の二項対立的図式にとどまるものではない。地域に展開する生物相と、その間に成り立っている多様な関係性として「生態系」があり、人間の存在もそのような関係性の総体たる「生態系」の中に位置づけて考えられるべきである。つまり、自然の改変者・開発者としてだけでなく、地域の生態システム全体の中で、人間活動の相対的な位置づけが問われねばならない〔佐野 2003〕。このような視点を持つことによって、「開発」にとどまらないさまざまな自然利用の姿、すなわち農業以外の生業についても論じることが可能となる。

古代の御厨における生活実態を取り出すためには、御厨の地形・気候的条件とともに、その上に展開する「生態系」、特に魚類を中心とした生物相の分析が不可欠である。魚類の生態と行動（生活史・食性・場所利用など）は、古代にも遡及しうるものであり、当時の地形と漁撈技術段階との照合によって、魚種ごとの捕獲原理や漁獲時期が推定可能である。さらに重要なことは、これら用

いられる漁法によって、御厨住民の生計サイクルが規定されることである。つまり、各御厨で行われた漁法が明らかになれば、「湖沼河海」の御厨ごとの漁撈活動と、その生活形態の相違が浮かび上がってくるはずである。

そこで本稿では、歴史地理学的手法に生態学的視点を取り入れることにより、「湖沼河海」のうち「湖」に設けられた御厨を対象として、その自然条件、生息魚種の生態と漁法を分析し、贅人の生活実態について検証する。本研究のフィールドとなるのは、日本最大の湖である琵琶湖に設けられた御厨である。古代中世の琵琶湖の贅人については、網野がその著作『日本中世の非農業民と天皇』に「近江の海民」の一章を設けているごとく、湖水を生活の場とする「非農業民」の代表例として扱われており、網野の「海民」概念の構築上、重要な一類型となっている。

古代の琵琶湖には、元慶七年（883）段階で、「勢多・和邇・筑摩」の三つの御厨が設けられていたことが知られる⁽¹⁾。このうち特に筑摩御厨は、御厨としては記録上最も古い8世紀から存在が確かめられ、貢進魚種名も記録されていることから、天皇への魚介供御に携わった古代の御厨の姿をよく伝えている。しかし従来、筑摩御厨の自然条件と漁撈活動に具体的に踏み込んだ研究はほとんどみられない⁽²⁾。かつて網野が提示した琵琶湖の贅人像も、その実態は主として中世以降の鴨社領堅田御厨の様相から析出されたものであり、古代の御厨の漁撈活動については十分な検証を経たものではない。したがって本稿では、この筑摩御厨を対象として、古代の湖の御厨における贅人の生活実態を検証する。

①……………筑摩御厨周辺の自然条件

(1) 筑摩御厨の歴史的概要

筑摩御厨の史料上の初見は、延暦19年（800）の太政官符である⁽³⁾。筑摩御厨長を大膳職から内膳司に改隸すべき旨が命じられており、したがって、筑摩御厨はこれ以前にすでに成立していたことが明らかである。

元慶七（883）年の太政官符によれば、この年までに近江国には「勢多・和邇・筑摩」の三御厨が設置されていた。筑摩御厨には、六年を任期とする御厨長がおかれ、膳部から太政官符によって補任されており、把笏が許されていた⁽⁵⁾。仁和元年（885）には、この筑摩御厨長並びに調丁を停め、徭丁をもってこれに充てることが命じられている（二年後には供御欠乏により旧に復される⁽⁶⁾）。この詔勅には、同時に「山城・河内・和泉摂津等の国の江長ならびに贅戸を停廃して、徭丁をもってこれに充てる」べきことが記されており、これら畿内の御厨が贅戸を擁していたのに対して、筑摩御厨では贅戸でなく調丁を使役している点が注目されている⁽⁸⁾。

9世紀後半以降、諸司・諸院・諸宮等が立てた員外贅人が増大したため、これらを停止する官符が相次いで出された。特に延喜二年（902）にはいわゆる「御厨整理令」が出され、筑摩御厨など内膳司が元来領した御厨以外には、臨時御厨や院宮王臣家厨を立てることが厳しく禁じられている⁽⁹⁾。しかし、このような度重なる制止にもかかわらず、諸王臣家や有力諸社による御厨の設置はこの後も着実に増えてゆく。延久元年（1069）には、荘園整理令をはじめとする一連の国政改革が行われ

るが、同時に「内膳司饌、諸国御厨子ならびに贅、後院等御贅」の停止が命じられ、翌年ついに筑摩御厨は停廃を迎えることとなった。⁽¹⁰⁾ここに古代的な御厨による贅貢進体制は崩壊し、以後、各地の御厨は所領化という中世的な変容を受けることになる。

11世紀に入ると各地の贅人は供御人と称され、御厨は供御人の免田を基本とする荘園へと大きく変貌を遂げる。網野[1984:252]によれば、このような御厨の中世的転換は、海民集団の定着度の増大を示すものと説明されている。網野は筑摩御厨に関しても、その停止後13世紀に現れる日吉社領筑摩十六条が「日吉社魚神供料所」となっていることから、かつての筑摩御厨の贅人が日吉神人に編成され、贅人の免田畠を起源とした荘園となった可能性を提起している[網野 1984:343-357]。この筑摩御厨と筑摩十六条をめぐることは、後章で詳しく検討したい。

筑摩御厨の所在に関しては、近世の近江国坂田郡筑摩村、現在の米原町朝妻筑摩がその遺称地とされている。⁽¹¹⁾筑摩村は琵琶湖の北東部に位置していたが、村域南部には琵琶湖岸に形成された潟湖である「入江内湖」が広がっており、琵琶湖と内湖の両水域に挟まれた水辺の村となっていた(図1)。北に古代以来の港として有名な朝妻村と接しており、さらに朝妻村の北方では天野川が琵琶湖に流入している。

村域南部の湖岸には筑摩神社が存在しており、『日本文徳天皇実録』仁寿二年(852)にある「授近江国筑摩神従五位下」と考えられる。この筑摩神社は『伊勢物語』百二十段にみえるように、その祭礼「鍋冠祭」で有名であった。⁽¹²⁾鍋冠祭は、女性がその一年に関係した男性の数だけ鍋を奉納する成女戒として知られているが、一方、この鍋を筑摩御厨における御贅加工という職掌と結びつける見解もある[米原町史編さん委員会 2002]。嘉吉元年(1441)の奥書を持つ『興福寺官務牒疏』によれば、筑摩神社の祭神は太歳神と宇賀魂神で、食物に関係していることから、筑摩神社が筑摩御厨と密接な関係を持って奉斎されていたことが推測されている。

この筑摩神社付近の湖岸では、発掘調査により筑摩御厨に関連するとみられる8～9世紀の遺物が出土している。遺構は検出されなかったものの、「月足」「郡」と墨書された土器や、鉄製刀子・風字硯・緑釉杯・神功開宝などが出土しており、これら遺物に官衙的色彩が強いことから、当遺跡と筑摩御厨との関係が指摘されている[米原町教育委員会 1986]。このように筑摩御厨は、筑摩村の湖岸に存在していたと考えられる。

(2) 筑摩付近の植生と旧地形

次に、この筑摩村一帯の古代・中世の地形条件について考察する。筑摩については、古代以来の歌枕としてその風景を詠んだ和歌が多く残されている。これらの和歌がすべて実景を見て作られたとはいいがたいが、当時の人々に喧伝された筑摩の景観イメージを知る手がかりになろう。

つくま江のそこの深さをよそながら ひけるあやめの根にて知るかな

(『永承六年五月五日内裏根合』)

11世紀の筑摩は、毎年5月5日の端午の節句に宮中へ菖蒲を貢進しており、菖蒲の「根合」に際して詠まれた歌が多く伝わっている。このような節句に合わせた音物の貢進も、筑摩が皇室の御厨であったことによるのであろう。筑摩はショウブの産地として都に聞こえていたが、同様に歌枕としての筑摩を詠んだものとして、

つくまえにおふるみくりの水はやみ またねもみぬに人のこひしき (『古今和歌六帖』)

筑摩江の玉江の芦のよたけきも 雁の水搔きに下枯れにけり

(『長久二年五月十二日庚申祐子内親王名所歌合』)

筑摩江の真菅ましの菖蒲草 かつ刈りほさん夏のひよりに (『夫木集』)

以上の句からは、ショウブに加えてミクリ・スゲ・ヨシなどが生育する湿地帯の景観がうかがえる。これらの植物はいずれも、根は水底に固着しつつも葉や茎などは水面より上に出る抽水植物に分類される。抽水植物は浅い穏やかな水辺を好み、泥底質の水域において繁茂する性質を持つ〔角野 1989〕。しかし当地の琵琶湖岸は、遠浅ではあるものの北西の季節風が卓越しており、風波の激しい砂礫底となっている。このような条件は、抽水植物群落の発達には適していない。

そこで注目されるのが、各首の「筑摩江の」という初句である。つまり筑摩には、琵琶湖から内陸側に流入した「つくま江」と呼ばれる入江が存在しており、琵琶湖の波浪から遮られたその内湾域に、スゲ・ヨシが繁茂する穏やかな水面が広がっていたことになる。『日本往生極楽記』および『今昔物語集』にも、近江国坂田郡の筑摩江に生えた蓮花を弥陀仏に供養した話がみえ、ハスの群生するような泥底質の入江が存在していたことを示している。さらにこの「つくま江」という地形に関して重視されることは、

あふみにかありといふなるみくりくる 人くるしめのつくまへの沼 (『道信集』)

ひまもなくふりもすさまぬ五月雨に つくまの沼のみくさ波よる (『堀川百首』)

のように、「つくまへの沼」すなわち琵琶湖から分立した池沼としても詠まれている点である。つまり 11 世紀段階の「筑摩江」とは、内陸側への流入の度合いが大きく、入江というよりもむしろ琵琶湖から隔てられつつある潟湖的水域であったとみてよいだろう。この「つくまへの沼」が、戦前まで筑摩村の南に広がっていた「入江内湖」を指している蓋然性は高い (図 1)。

ただし、当時の入江内湖は現在とは形状を異にしていたと考えられる点で、注意が必要である。⁽¹⁴⁾ 近世以前の内湖水域は、現在よりも北方の筑摩村・朝妻村付近まで入り込んでいたと推測される。現状では沿岸ヨシ地の水田造成が繰り返され、内湖の湖岸線は大きく後退しているが、空中写真の実体視からは、図 1 のように旧来の内湖水面が筑摩集落の背後まで広がっていた様相が判読される。このように内湖が現在よりも北側に大きく入り込んでいたと想定されるならば、筑摩集落の背後に広がるその水面は、「筑摩江」「つくまの沼」と呼ばれるにふさわしい景観であったといえよう。

空中写真の判読からは、さらにもう一点、筑摩一帯に大きな地形変化があったことがうかがえる。それは北方を流れる天野川の河道変遷である。現在の天野川は、筑摩村よりさらに北方、朝妻村の北を流れているが、空中写真を実体視すれば、それよりも南、朝妻村と筑摩村の間に明瞭な旧河道が認められる (図 1)。この旧河道がいつの時代のものであるかについては後ほど検討するが、「つくまの沼」の旧地形と合わせ、このような地形変化の様相は、古代の筑摩御厨の自然環境と生態系を考える上で重要な基礎となる。

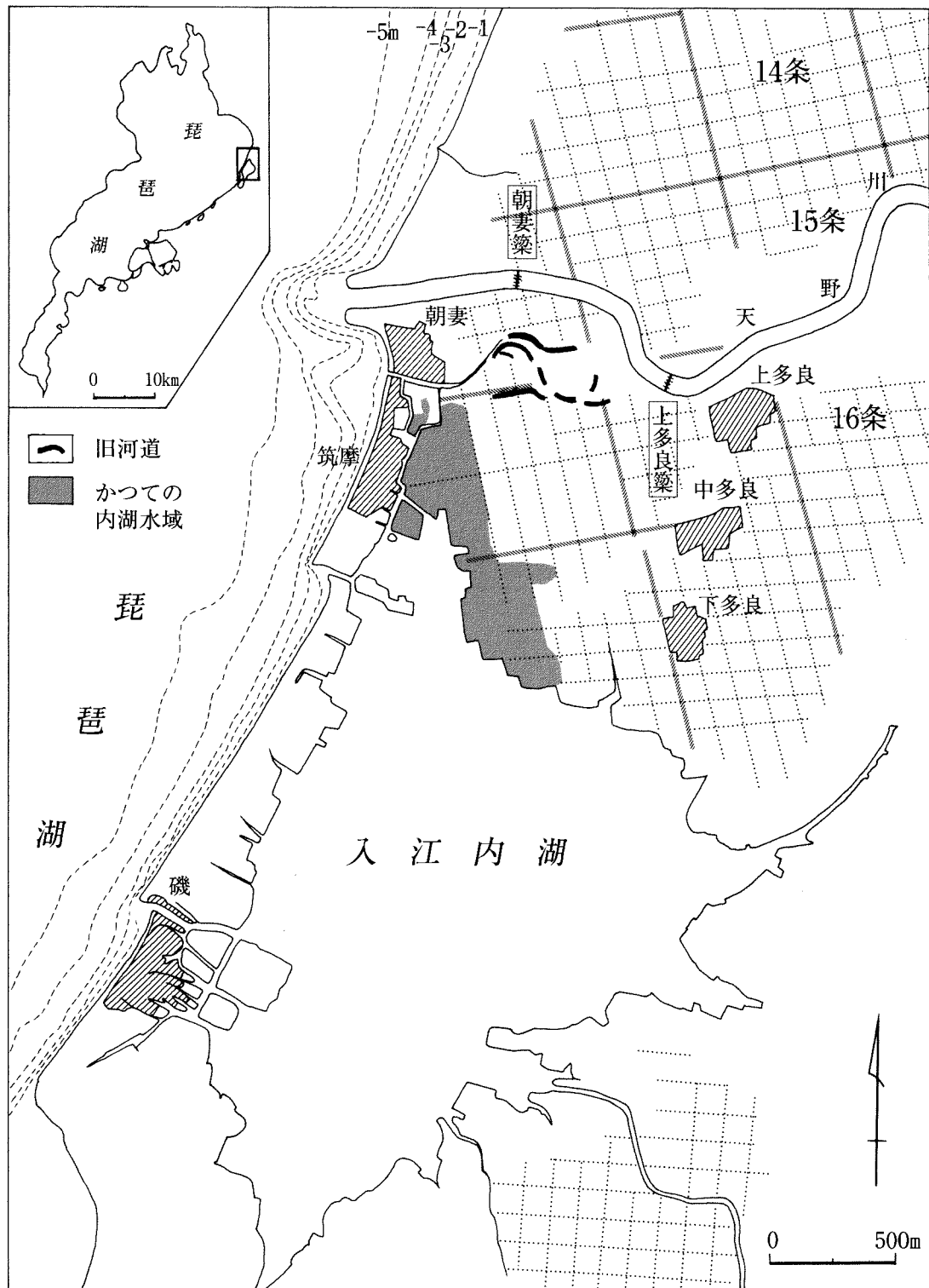


図1 筑摩御厨比定地付近の地形

※ベースマップは明治初期の地籍図を国土基本図に投影して作成。微地形復原は空中写真判読による。

②……………筑摩御厨の貢進魚類とその生態

(1) 筑摩御厨の貢進物

次に本章では、筑摩御厨における生態学的環境と、贅人の漁撈活動の実態について考察する。まずは、筑摩御厨から貢進されていた魚類の贅の内容について検討したい。

当御厨からの貢進物は『延喜式』内膳司に詳述されており、「造醬鮓鮓鮓各十石、味塩鮓三石四斗、近江国筑摩厨所進、料、缶卅口、商布十八段、信濃麻一百斤、酒五斗、米一石、塩八石、醬大豆二石五斗」となっている。すなわち、筑摩からの贅は、醬鮓・鮓鮓・味塩鮓というフナの加工品三種であり、「料」以下はその調製のために大蔵省から下された「造料物」である。「造料物」中に原料となるフナそのものが見えないのは、それが現地で捕獲されていたことを示している〔桜井 2002〕。したがって筑摩御厨では、フナを捕獲し、それを加工して内膳司へ貢上していたことになる。

醬鮓・鮓鮓・味塩鮓の具体的形状については、すでに桜井〔2002〕による詳細な分析があり、味塩鮓は薄く塩をしたフナ、醬鮓はフナを醬に漬けたものとされる。鮓鮓は米を用いていることからわかるように、フナを乳酸発酵させたナレズシである。このように、『延喜式』によれば筑摩御厨からの貢進物がすべてフナの加工品であったことがわかり、琵琶湖岸の御厨におけるフナ漁獲の重要性をうかがうことができる。

さらに『延喜式』に加えて、平城宮出土木簡にも筑摩御厨からの贅貢進を示すとみられる記載が存在する。

- A. ・筑麻醬鮓肆斗壺□
・供 御料
- B. ・筑麻□□参斗
・ 供

これら二例の木簡は、八世紀前半のものと考えられ、二条大路上の南濠状遺構から出土しており、二条大路南の左京三条二坊の光明皇后宮との関係が想定されている〔奈良国立文化財研究所 1995〕。木簡には「筑麻」とのみあって「御厨」の語はみえないため、この時点で御厨が成立していたか正確には断定できないが、「供御料」とあることと皇后宮との関係を考え合わせると、御厨から貢上された供御物であった可能性は高いといえる。⁽¹⁵⁾

これらの木簡で注目すべきは、Aの「筑麻醬鮓」である。前述の『延喜式』にみられたフナとは異なり、ここではアユの醬漬けが筑摩から貢進されていたことが確認されるのである。従来、筑摩御厨の贅をめぐっては、今日の「鮓ずし」の起源として、フナばかりに目を奪われがちであった。しかし、以上のようにフナのみならずアユの貢進も認められることは非常に重要な意味を持つ。この二種は同じ淡水魚とはいえ、魚類生態学的には生息環境も行動も全く異なるものだからである。筑摩御厨がどちらの魚種も漁獲しうる自然条件にあり、かつ両種の捕獲を両立させうるような漁法に従事していたことになる。したがってこの湖の御厨での漁撈活動を理解するために、以下にフナとアユそれぞれの生息環境と生態行動を分析し、それにながった魚捕原理について検討してみたい。

(2) 琵琶湖のフナの種類と生態

まずは筑摩御厨におけるフナ漁について考察する。琵琶湖に生息するコイ科フナ属には、ギンブナ、ニゴロブナ、ゲンゴロウブナの三種がある。このうちギンブナは日本各地に広く分布しているが、ニゴロブナとゲンゴロウブナについては琵琶湖水系の固有種であることに注意が必要である。これら三種は体長が著しく異なっており、漁獲対象種としての有用性にも大きな差がみられる(表1)。

表1 琵琶湖に生息するフナ属

	ギンブナ <i>Carassius gibelio langsdorfi</i>	ニゴロブナ <i>Carassius carassius grandoculis</i>	ゲンゴロウブナ <i>Carassius cuvieri</i>
全長	約25cm	約35cm	約40cm
分布	北海道・本州・四国 ・九州・琉球列島	琵琶湖水系の固有種	琵琶湖水系の固有種
生活場所	内湾・内湖	夏期:水深15~20mの底層 冬期:水深40mの底層	沖合の表・中層
主な料理法	煮付け	鮓ずし	刺身・なます

※宮地・川那部・水野(1963), 三浦(1971), 川那部・水野(1989)より作成

ギンブナの全長が成魚でも約25cmであるのに比べて、ゲンゴロウブナは40cm、ニゴロブナも約35cmまで成長する[川那部・水野1989]。ギンブナは肉量が少ないことから、琵琶湖周辺での漁獲価値は低く、雑魚扱いとなっている[滋賀民俗学会1974]。これに対し、ゲンゴロウブナとニゴロブナは食材として高い価値を付与されており、肉付きの良いゲンゴロウブナは刺身・なます用に、骨の柔らかいニゴロブナは鮓ずし用として重視されている[滋賀の食事文化研究会2003]。古くは養老令から、さらに『新猿楽記』にみるごとく、フナの名品といえば古来「近江鮓」が第一とされたのは、このように他地域のギンブナとは異なる「固有種」という生物学的要因によるものであろう。

ギンブナ、ニゴロブナ、ゲンゴロウブナの三種は、生息場所を異にしている点でも特徴がある。ギンブナは周年、内湾や内湖などの浅い水域に生息しているが、他の二種はいずれもほとんどの期間を湖岸から離れて生活する。ゲンゴロウブナは沖合の表・中層に生息し、ニゴロブナは夏には沿岸帯の水深15~20m、冬には40mの底層に生息している[三浦1971]。したがって、漁獲価値の高い固有種ほど、沖合や底層部にいるために技術的には捕獲が困難である。現に、深水部においてフナを漁獲する技術は、滋賀県では大正期に入るまでは存在していなかった[伊賀1954]。しかし通常は沖合にいるこれら二種のフナも、4月~6月には、産卵のために大群をなして沿岸域に近づいてくる。よってこの期間には「寄り魚」化したフナを労せずして捕ることが可能である。

この時期のニゴロブナ・ゲンゴロウブナの捕獲が原始的漁具でも容易であったことは、縄文時代の事例からも確かめられる。琵琶湖の南東岸、縄文時代中期の赤野井湾遺跡から出土した魚類

遺存体に関して、咽頭歯咬合面の分析からゲンゴロウブナがフナ属のうち約4割を占めていたことが解明されている〔内山・中島 1998〕。このゲンゴロウブナの漁獲方法は、縄文時代の技術段階からみて沖合域に漕ぎ出すものではなく、産卵期の4月～6月に沿岸域で捕獲したものと推測されている。

このようなニゴロブナ・ゲンゴロウブナの産卵行動を、筑摩周辺の自然条件と合わせて考察してみたい。これら二種は湖岸のヨシや水草に卵を産み付けるため、春になると波浪の少ない内湾・内湖に入り込んでくる〔三浦・須永ほか 1966〕。筑摩村には「つくまの沼」=入江内湖が存在していたが、その穏やかな水域は、フナの産卵場所として最適のものであった。つまり入江内湖とは、琵琶湖から遡上するフナにとって、生態学的には産卵地の機能を持っていたのである⁽¹⁶⁾。

前章で明らかにしたように、和歌等に詠まれた景観の分析から、筑摩一帯にはすでに11世紀段階で内湖が存在していた可能性が高い。したがって、この内湖=「つくまの沼」を擁する筑摩一帯が、御厨の時代においても内湖への産卵に向かう大群を捕獲しうる好漁場であったことは明らかである。筑摩御厨におけるフナ漁は、このような産卵場所としての内湖地形の存在によるところが大きかったことが理解されよう。

(3) 筑摩御厨におけるフナの漁法

次に、このような産卵期のフナを捕獲する方法について考えてみたい。最も原初的な漁法は、産卵場所である内湖にエリなどの待ち受け型漁具を設置することである。事実、戦前までの入江内湖は、エリ漁の盛んな地であった〔佐野 2003〕。

しかし、このような内湖での待ち受け漁法で捕獲されるのは、すでに産卵行動に入った個体であり、卵が体外にはみ出したり、産卵を終えた状態であることも多い。現在の味覚でいえば、フナは抱卵した状態の方が漁獲価値は高いとされる。一般的に魚類は産卵を済ませた後では味覚的に劣るといわれるが、琵琶湖のフナも同様であり、すでに江戸期の本草書類でも、産卵後の個体を特に「へりガラ」などと呼び分けて価値が落ちるものとしている⁽¹⁷⁾。一方、産卵前の抱卵個体は食材として重視されており、鮒ずしには子持ちのニゴロブナが使われ、またゲンゴロウブナのなますについても、「鮒の子まぶし」といって刺身に卵をまぶした状態で賞味されるのが一般的であった⁽¹⁸⁾。

このように抱卵したフナを好む風潮が古代まで遡りえるかについては検討が必要だが、「鮒の子なます」はすでに『今昔物語集』にもみえており⁽¹⁹⁾、また今日なお県内各地で行われ、中世から存在が確かめられる祭礼「鮒切祭」において、神饌が必ず子持ちのフナと定められていることも注意されよう〔草津市教育委員会 1978；滋賀の食事文化研究会 1995〕。以上から、古代においても同様に抱卵個体が重視されていた可能性が推測される。

フナを抱卵状態のまま捕獲するには、産卵にはまだ日数があるフナを、内湖へ遡上する前段階で捕獲する必要がある。つまり、内湖の外側の琵琶湖岸において、沖からやってくる個体を狙うことである。古代の技術段階で、このような琵琶湖側でのフナ漁獲は可能だったのであろうか。エリなどの待ち受け型漁具は泥底質の浅い水域に構築するが、風波に弱いため、前述のように北西風の強い当地の琵琶湖側への設置は困難である。そこで結論からいえば、琵琶湖側でのフナ漁獲を可能にしたのは、地引網漁法であったと考えられる。

古代の琵琶湖周辺に地引網の技術が存在したことは、12世紀の史料から確かめることができる。⁽²¹⁾ 地引網の詳細を記した資料は近世期まで下るが、藁縄を素材とした網を、陸地より15～20町沖合まで伸ばし、春～初夏に接岸してくるフナを漁獲していたことが知られる。⁽²²⁾

17世紀の史料によれば、この時代に琵琶湖岸で地引網＝「大網」を保持していた村々は、堅田を含めわずか10ヶ村にすぎなかった。その中に、筑摩村がみえることは重要である。近世初頭の筑摩村が大地引網を保持していたことは村方文書にも見えるが、⁽²³⁾ 本稿では特に、戦国期に記された筑摩神社の縁起に、地引網を示す記載があることに注目したい。永禄十年（1567）の『筑摩大神之紀』によれば、祭礼時の神供の鮒について、「二月の上巳日、湖海に網を引ハ、彼片鱗の魚きわめて網に上りぬ」とある。❶章で述べたごとく、筑摩神社は筑摩御厨と密接に関わる国史見在社である。筑摩御厨から貢進された「醬鮒・鮓鮒・味塩鮒」が、やはり地引網で漁獲されていた可能性が示唆される。⁽²⁴⁾

筑摩村の大地引網は江戸後期には廃絶したため、その詳細を知ることはできないが、琵琶湖岸で行われていた大地引網は、砂地の遠浅地を漁場適地としていたことが知られている〔伊賀 1954〕。突起物が障害となるために、岩石湖岸での操業は不可能であるし、また一方、泥地では網が沈み込み、繁茂する水草を巻き込んで曳き上げが困難となる。筑摩村の前面にあたる琵琶湖側には、北西からの風波が運搬した砂浜が広がっており、水面下にも砂～砂礫の底質が岸から2km近い幅をもって带状に分布している。⁽²⁵⁾ 琵琶湖沿岸帯においてこのように砂質底が広く分布する地域は限られており、筑摩一帯は地形・地質条件の点でも、産卵地を控えた生態学的条件からみても、地引網の漁場として最適であったことがわかる。このように、古代の筑摩御厨では、春～初夏において地引網にてフナ漁を行っていた様相が推定される。

❸……………筑摩御厨におけるアユ漁と天野川の流路変遷

(1) 琵琶湖と河川のアユの生態

次に、筑摩御厨のもう一つの貢進魚種であったアユの生態と捕獲方法について考察したい。琵琶湖産のアユは、海と河川とを回遊する本来のアユとは異なり、陸封型の生活史を持っているため、生態行動とそれに即した漁法が他地域とは大きく異なっている。

日本各地で普通にみられるアユ（両側回遊型）は、秋に河川下流で孵化した後、直ちに海に下り仔稚魚期を海中で過ごす。春期になると河川に遡上し、夏期は中流域で成長する。この間、定住性を高めた個体は「なわばりアユ」となることで知られている。秋には中流域と下流域の境目付近の瀬に下って産卵し、その生涯を終える。アユは一年で一生を終える「年魚」である〔宮地・川那部ほか 1963〕。

一方、陸封された琵琶湖産のアユは、これとは大きく異なる生活史を持つ。魚類学的には、琵琶湖のアユは、①琵琶湖を海の代わりとし、春に流入河川へ遡上して大きく成長する「遡河群」、②生涯の大部分を湖中で過ごし、小サイズで成熟する「残留群」に大別されている〔川那部・水野 1989〕。県下の漁業者は、遡河型に相当する体長10cmを越える個体をオオアユ、琵琶湖残留型を

コアユと呼び分けている。このように特殊な生活様式を示す琵琶湖産アユに対して、古代・中世段階ではどのような漁法が用いられたのであろうか。

現在の滋賀県のアユ漁は、全国への放流用の稚アユを主対象としているため、湖中に生息するコアユ及びオオアユの仔稚魚を、湖岸や沖合において捕獲するのが一般的となっている。しかし、これら湖中において稚アユを捕獲する技術は、いずれも近世後期以降に発明されたものである〔伊賀 1954〕。県下の中近世史料を分析すると、近世前期までのアユ漁は、琵琶湖よりも流入諸河川において行われていたこと、つまり近江のアユ漁が遡河型アユを主対象としていたことがわかる。伝統的なアユ漁は、現在の琵琶湖でのアユ漁獲法とは全く異なっていた点で注意が必要である。

河川でのアユ漁のうち、最大の漁獲効率を誇る漁法は、河口近くでの「上り築」漁であった。築とは、河川において河流を竹簀等で遮断し、立ち往生した魚を陥穽装置や別漁具で捕獲するものである。遡上魚を対象とする「上り築」と、降河魚をねらう「下り築」とに大別されている〔日本学士院 1959〕。日本各地でのアユ築は、秋の増水期に下流の産卵地へ下っていく「落ち鮎」を獲る「下り築」が通例であるが〔農商務省水産局 1910〕、近江においては、琵琶湖から遡上してくるアユをねらう「上り築」の方が一般的となっている。海洋と比べて流入河川規模が小さいため、河道を全部遮断して築を設けることが可能であり、そのため河口に最も近い「上り築」では、遡上するアユの大部分を捕獲することができた。⁽²⁶⁾このように最下流の築は、一河川のアユ資源をほとんど独占しえた点できわめて優位性が高いが、野洲川築と兵主神社との関係にみるように、中世においてこの最下流の築が神社の特権的な供祭築として現れる事例のあることは注目される〔祝宮 1937〕。

近江における築漁は、曾丹集の「野洲川の早瀬にさせる上り築 けふの日和にいくら積もれる」にみるように、すでに 10 世紀には存在していたことが確かめられる。古代中世の近江のアユ漁法としては、やはり河川での「上り築」が重視されていたことがうかがえる。

(2)「筑摩十六条川」における築漁

古代の筑摩御厨は「醬鮎」を貢進していたが、その原料となるアユは、やはり河川で捕獲されていた可能性が高い。筑摩御厨の付近において、前節のような河口近くの「上り築」によるアユの河川漁は確かめられるであろうか。

可能性としてあげられるのは、筑摩村の北方、朝妻村を流れる天野川存在である。天野川では近年まで上り築漁が盛んに行われており、最下流に「朝妻築」、上流側に「上多良築」が設置されていた（前掲図 1）。この天野川のアユ資源量について、注目すべきデータがある。明治十七～十九年にかけて実施された滋賀県下の築漁獲調査によれば、⁽²⁷⁾最下流の「朝妻築」の春期漁獲高（3 か年平均額）549 円は、県下の春期築で第一位の数値となっている。春築の対象は遡上アユであり、天野川への遡河量の多さと、最下流での漁獲効率の高さを知ることができる。

このような天野川の築について、先行研究ではその起源を 14 世紀にさかのぼるとみている点が注目される。上多良村口家文書中の建武三年足利尊氏御判御教書写に「近江国筑摩拾陸条武梁事」として、「多良川春梁並びに鯨梁」を藤原重俊に安堵することが記されている。従来の研究ではこの文中の「多良川」は天野川を指すものと理解されており、天野川築の歴史性を示す資料として重視されてきた〔伊賀 1954；米原町史編さん委員会 1999, 2002〕。この文書の真正性には問題が残るが、

築の位置関係に関しては、「多良川」の二築が「筑摩拾陸条」に位置していたことを伝えている。「筑摩拾陸条」とは、正嘉元年（1257）に初出の日吉社領であり、坂田郡条里の十六条に位置したことに由来する呼称である。

天野川築に関する他の史料は戦国期まで下るが、一方、日吉社領「筑摩十六条」にある「十六条川（江川）」からの供祭を記す中世史料が多く残っていることは目を引く。日吉祀官樹下氏に関わる宝徳三年（1451）の「筑摩十六条江川売券」には、「惣而此江川者、為貢祭之神供料上者」とある⁽²⁹⁾。また文明三年（1471）の「某奉書写」にも、「筑摩十六条川」にて「供祭等嚴重可致沙汰由」が記されている。⁽³⁰⁾『伺事記録』延徳二年（1490）に、「日吉社魚神供料所筑摩十六条郷」とあることから、「筑摩十六条川」から日吉社へ進められた供祭物が魚類であったことは間違いなく、それは築で捕獲されたアユであった可能性が高いといえよう。

先行研究では、これら中世の供祭築が架けられた河川を現在の天野川とみているが、この点は正しいのであろうか。じつは現地の地形に即して考えた場合、現天野川を上記の「筑摩十六条川」と考えることには大きな問題がある。坂田郡条里の復原によれば、現在の天野川の下流部は十六条を通過はならず、「筑摩十六条川」の呼称には適合しないのである。前掲図1にみるごとく、現天野川の河道は明らかに十五条に位置している。この十五条は、もと延暦寺領富永荘の一部であった「筑摩十六条」とは異なり、法勝寺領朝妻荘の荘域であった。⁽³¹⁾⁽³²⁾⁽³³⁾やはり、十五条に位置する天野川をもって、「筑摩十六条川」とみなすことはできない。したがって、この現天野川に設けられている今日の築を、日吉社供祭築や古代の筑摩御厨に直結することには無理がある。

さらにもう一つの問題となるのは、「朝妻築」と「上多良築」設置の前後関係である。朝妻村および上多良村に伝来された近世の築漁相論文書群によれば、築の設置年代は上流側の「上多良築」が古く、河口側の「朝妻築」は寛永元年（1624）頃に新しく設けられたものという。⁽³⁴⁾この二つの築の設置順序には、アユの生態行動と照らし合わせるときわめて不可解な点がある。前述のように遡上アユの捕獲に関しては、河口に最も近い位置が有利となる。実際、天野川に設置された各築の漁獲高をみても（前掲明治十七～十九年統計）、「上多良築」をはじめとする上流側の築に比べて、最下流にある「朝妻築」の優位性が際立っている（図2）。築は漁獲効率の良い下流側から優先的に設置されるはずであり、河口から1km離れた

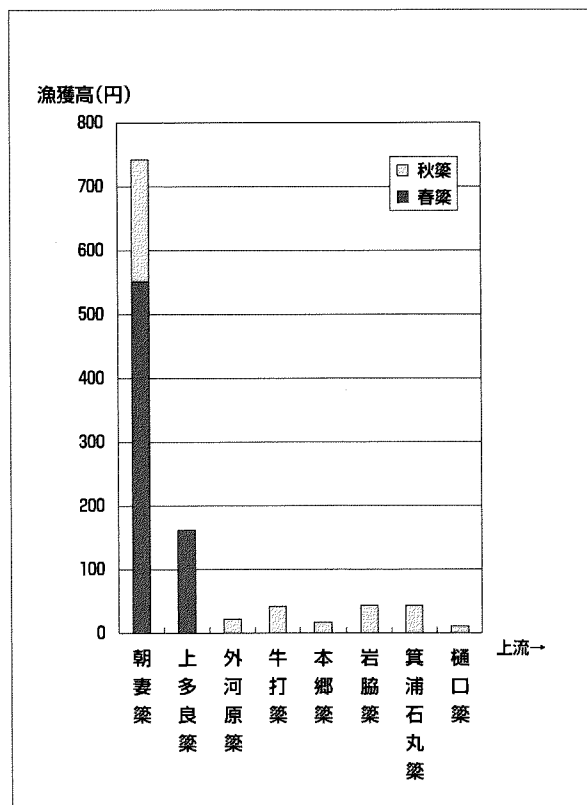


図2 天野川の築一カ年平均漁獲高(明治17～19年の平均値)

上多良に一番目の築をおくことは、他の諸河川と比較してもきわめて不自然である。最下流に位置する「朝妻築」の設置が遅れたという事実は、どのように解釈すればよいのであろうか。

以上のような問題に対して、解決の手がかりを与えるのは、第①章でとり上げた天野川の旧河道の存在である。つまり、天野川に河道の変遷があり、中世までの天野川が現在とは異なるルートをとっていた可能性である。天野川現河道の南側に存在した旧河道について、その位置に注目したい（前掲図1）。この河道は、坂田郡条里の16条を通った後、15条との里界線付近を流れており、筑摩において琵琶湖へ流入していた。このルートならば、「筑摩十六条川」の条件に合致することになる。また旧河道の琵琶湖流出部の湖底には、明瞭な沈水三角洲が認められることから、この流路が長期間存在した有力な河道であったことが明らかである。したがって天野川の中世までの本流は、こちらであった可能性が高い。

中世の天野川は、現河道よりも南の筑摩付近で琵琶湖に流入しており、「筑摩十六条川」「筑摩十六条江川」と呼ばれるにふさわしいルートを流れていたと推測される。この河道に当時の築が設けられたと考えるならば、漁獲効率の良い最下流の築は、筑摩付近にあったことになる。つまり、中世までの筑摩では、最も好条件の「上り築」によって大量の鮎が漁獲されていたと考えられる。日吉社の供祭築とはこの築を指すものであり、それが「筑摩」に位置していた点で、やはり「日吉社魚神供料所筑摩十六条郷」には、古代にアユを貢進していた筑摩御厨の残像が投影されているとみられる。網野善彦は、中世に供祭の築を保持した日吉神人のかつての筑摩御厨の贄人の流れを汲むものと推測しているが〔網野 1984:356-357〕、このように「筑摩十六条川」におけるアユの築漁は、古代の筑摩御厨にそのルーツを持つものと考えてよいであろう。

天野川が現在の河道へと流路を変えたのは、15世紀末以降のこととなるが、天野川の朝妻方面への河道変化に伴って、筑摩の旧来の築に代わって、朝妻の新しい河道に築が設けられるようになったと推定される。このような経緯を想定すれば、「朝妻築」の設置が新しいとする記述も合理的に説明がつく。

以上のように中世までの河川地形を復原すれば、漁獲量が最も多い最下流の築は本来筑摩に設置されており、筑摩御厨のアユ貢進はこの築によっていたことが推定される。したがって、以上の③章と④章の考察をまとめると、筑摩御厨における漁撈活動は、琵琶湖岸でのフナの地引網漁と、旧天野川下流の「上り築」によるアユ漁が、ともに行われていたことになる。漁期については、この両種の魚類生態から、春～初夏の間に集中していたことが導かれる。

④……………考察—筑摩御厨における贄人の生活形態

(1) 漁法と移動性

前章までの分析をもとに、本章では、筑摩御厨における贄人の生計サイクルについて考察する。古代の筑摩御厨で行われた漁法は、琵琶湖岸でのフナの地引網漁と、河川での遡上アユの「上り築」漁であった。このような地引網と上り築がセットとなった漁法パターンは、琵琶湖岸では筑摩以外の御厨でも認められる。

上賀社領安曇河御厨においては、元暦元年（1184）の官宣旨に「御厨漁河流、冬所釣海浦」⁽³⁵⁾「無煩令引網」とあり（『平安遺文』）、「漁河流」については貞永元年（1232）の官宣旨に、「漁築者、専以河尻為本之間」とあって、安曇川河口付近での上り築であったことがわかる（『鎌倉遺文』）。「引網」は湖岸での地引網漁とみてよい。このような築漁と地引網との併用は、筑摩御厨での漁撈活動と非常に似通っていることを指摘できる。これらの漁法は、贅人にとっていかなる生活形態を生み出したであろうか。

注目すべきは、地引網と上り築がともに、産卵・遡河という魚類の生態行動にあわせて、魚が近づいてくる時期をねらって行われたことである。つまり、回遊する魚を追いかけて沖に出かけるのではなく、近づいてくる魚を陸地から漁獲する「待ち」の漁の性格が強いことである。⁽³⁶⁾

ニゴロブナ・ゲンゴロウブナは、産卵期以外は沖合に生息しているが、もともと近江のフナ漁は沿岸域を対象空間としており、水深 30 m 以上の深水部においてフナを漁獲する技術は、大正期に入るまでは発達していなかった。⁽³⁷⁾したがって古代の御厨漁撈の段階では、沖合のフナを捕獲するために船で漕ぎ出していくことは、技術的に困難であったと考えられる。地引網の漁期は、フナが接岸する 4 月～6 月に中心があったが、琵琶湖岸の内湖で第 2 位の面積を持つ入江内湖には、琵琶湖北部で最も多くのフナが集まる。⁽³⁸⁾よってこの同じ時期に、あえて遠い他の場所まで移動して漁を行なう必然性は低かったといわねばならない。

以上のように、産卵期を対象にした御厨のフナ漁法では、漁場は地先水面を主としており、沖合水域まで船で移動する必要性は高くなかったことが指摘される。従来の研究では、地引網漁について、「一応の拠点はあっても、本来、移動しつつ漁撈に従事する『海中網人』」とされ〔網野 1984 : 255〕、移動的漁民とイメージされることが多かった。しかし、琵琶湖における地引網漁は、春～初夏に日帰り圏の地先水面において操業されるきわめて限定的な形態をとっており、魚の季節的回遊を追って一年中移動を繰り返す「遍歴漁民」とは異なる生活実態であったことを重視したい。⁽³⁹⁾

一方、網野は琵琶湖においても「遍歴する『海中網人』」の存在を想定しており、その根拠として、寛治四年（1090）に初見の「堅田網二帖」を保持した下鴨社領堅田御厨の網人をあげている〔網野 1984 : 254〕。たしかに堅田網人については、その後近世にいたるまで、年間を通じて移動的漁撈を行っていたことが確認される。しかし堅田の漁法の主力は、地引網よりもむしろ小糸網（＝底刺し網）と延縄漁にあったことに留意せねばならない〔伊賀 1954〕。琵琶湖では堅田のみが保持していたこれら二種の漁法は、何よりも深水部での漁撈を可能とするところに特色がある。⁽⁴⁰⁾つまり小糸網と延縄の技術こそが、他村の及ばない琵琶湖沖合域を漁場とし、湖上を広域的に移動する堅田独自の漁撈形態を生み出したと考えられるのである。⁽⁴¹⁾これら二種の漁法は近世初期までは堅田以外の村にはく伝存しておらず、その技術は、琵琶湖での漁撈系譜上は孤立した位置づけにある。堅田御厨の名が、琵琶湖の御厨名を列举した元慶七年（883）官符、あるいは『延喜式』にも見当たらないことから、海洋より移入の可能性を含めて、その成立については別途に検討を要する。堅田の技術は琵琶湖漁撈においてきわめて特異な位置づけにあり、この堅田網人をもって「近江の海民」の典型とみなすことはできないのである。

これに対して、上り築と地先での地引網漁に従事していた筑摩御厨や安曇河御厨では、いずれも陸地に定点をおいた、きわめて定着的な漁撈活動が行われていたことが注目される。筑摩御厨と同

じ時期、9世紀段階に琵琶湖に存在していた勢多御厨・和邇御厨についても、同じく築漁と沿岸漁法がこれらの地域で行われていたことが中世以後の史料から推測される〔伊賀 1954〕。

したがってこれら琵琶湖岸の御厨漁撈においては、網野の示した贅人像、すなわち「船を主たる生活の場とする海民」〔網野 1984: 254〕というイメージとは、全く異なる生活実態が浮かび上がってくる。網野は、漁撈活動の多くを「遍歴・移動的生活」と捉えているが、漁法にはその対象魚種の生態によって、回遊魚を追う移動型もあれば、止水性の魚を対象とする定着型もある。従事する漁法の相違によって、贅人の定住性と漁撈への専従性の度合いは異なってくるのである。

(2) 定住と「漁+農」複合生業

次に、筑摩御厨でみられるように、定着型漁法をとる贅人の生活形態について考察したい。漁撈への専従性を左右する要因には、漁獲可能期間と年間生業暦の問題が上げられる。琵琶湖において、中世までの漁法でフナやアユの捕獲が可能であったのは、主として春～初夏であり、それ以外の季節においては漁撈のみで生計を立てることは困難である。

この点に関し、定着型漁法により定住生活を営む贅人は、漁間の農耕が可能であったことに留意すべきであろう。近江盆地では、近世まで田植えの時期は多く六月末であり、フナ漁が終わった後、11月の刈り取りまでは水田農耕に従事することが可能であった。また定置漁法である河川の上り築漁では、アユの回遊を追って河川上流一下流間を季節移動する必要はなく、いったん築を構築した後は、朝夕の二回、捕魚部に溜まったアユをタモ網等で取り上げるだけでよい。よって日中は、農耕をはじめとする他の生業に従事することが通例であった。この場合、農耕の比重は「副業」と断定できるほど低いものであったかどうか、検討を要するであろう。

以上のように、陸地に定点をおいた漁法では、「水上に暮らす」イメージとは異なり、水陸が入り混じる移行帯において、漁撈と農耕が分かちがたく結びついた複合生業形態が形成されることとなる。⁽⁴²⁾この「漁+農」の複合形態が、琵琶湖岸において広く認められる生業パターンであったことは、戦前までの民俗事例のみならず、橋本道範によって古代・中世の資料からもすでに確かめられているところである〔橋本 2001〕。このような水田農耕とフナなど止水性のコイ科魚類の漁との結びつきは、琵琶湖にとどまらずモンスーンアジア全体の風土として、広く認められている特徴である〔琵琶湖博物館 1998〕。

網野は、当初の御厨は田畑と結びついたものではなかったとして、贅人の定着性の増大を11世紀の供御免田の確立以降のことと推測している〔網野 1984〕。しかし、漁獲対象となる魚種の生態によっては、当初から定住的形態をとる御厨も存在したことが推測され、贅人と水田のつながりをすべて中世以後に生じた新しいものとみなすことはできない。西岡〔1953〕の指摘する「御厨の機能が水陸両面に関連」し、住人の生活も漁撈と農耕を兼ねていたという状況は、中世以前にもさかのぼる可能性がある。

加えて、湖沼のような止水域における自然環境下では、捕獲される魚種の商品価値が漁撈への専従の阻害要因となっている可能性を指摘しておきたい。フナ・コイなど温水性魚類は、産卵期には水田周辺にまで入り込んでくるため、抱卵状態にさえこだわらなければ、だれでも容易に捕獲することができる。つまり、「漁+農」複合形態の琵琶湖岸では、「漁師のもたらすものは、ほとんどす

べて農民にも自給可能なものであった」[安室 1990] ののである。一時に大量捕獲されるコイ科魚類については、流通圏・商品価値ともに、そのみで生計を立てられるほど高次のものではなかったといえる。このことは、特殊な技術によって捕獲された海域や河川の回遊魚が、高い商品価値を持ち、移動的漁民の専門的な生計を成り立たせたこととは対照的である。したがって「専門漁民」の出現とは、社会的分業の成熟度にも起因するのではなく、上記のような生態的環境要因にも規定されるものと考ええる。

止水性の定着型漁法を中心とする琵琶湖岸の御厨は、もともと漁撈への専従化が成り立ちにくい生態的環境にあったといえよう。したがって、このような御厨での生活実態として、移動・遍歴型の専門的漁民をイメージすることは困難である。

(3) 湖上特権と漁撈・廻船—筑摩御厨と朝妻港

筑摩御厨における生活実態を以上のように定住的形態と考えるならば、古代中世の御厨贅人に与えられていたという「広域移動の特権」とは、どのように理解されるべきかが次に問題となろう。網野は、贅人には「いかなる水面においても自由な漁撈をなしうる特権」あるいは「関渡津泊の自由通行権」が付与されていたとし[網野 2001b]、各御厨にこの特権が与えられた時期を、延喜五年(905)と推測している。この年、河内国大江御厨に対して「『国中池河津』のすべてを領せしむ」との蔵人所牒が発せられており、網野はこれを御厨の広域水面に対する特権の承認であるとして、同趣旨の牒が大江御厨だけでなく摂津国津江御厨、和泉国網曳御厨、さらに山城、近江を含めた大化前代からの各御厨に同時に下されたと推定している。

しかし、琵琶湖の御厨での漁撈が地先水面を対象とする定着的なものであったとするならば、少なくとも近江国における延喜五年の所牒の解釈は従来とは異なってくる。つまり、琵琶湖の御厨では、この広大な湖上移動の権利は漁撈のためではなく、第一義的に舟運の支配権として理解されるべきではないかという可能性である。

この点に関して重要なのは、筑摩御厨と港との位置関係である。筑摩御厨に隣接する位置に、古代の港として知られる朝妻港が復原されるからである。奈良時代、すでに東山道からの物資積替点として機能していた朝妻港は、天野川河口に存在していたとされる。朝妻港の位置は現在の天野川河口部に比定されているが、前章で述べたごとく、中世までの天野川流路は現在と異なっていたため、朝妻港の位置も、その旧河道の河口部に復原されるべきである(図3)。空中写真判読によれば、旧天野川の河口部付近には入江内湖の水域が迫っており、この内湖入口と天野川河口をつなぐ水路が、船溜りとして利用されたことが推定される。このようにして復原される朝妻港は筑摩と接する位置にあり、この空間配置は古代の筑摩御厨と朝妻港が深くかかわっていたことを示唆している。

筑摩御厨と同時期、9世紀の琵琶湖岸に存在した勢多御厨・和邇御厨についても、それぞれ勢多津、和邇船瀬が近接して設けられていたことが明らかである。このように琵琶湖岸における古代の御厨には、同時期の港との並存関係が濃厚に認められ、御厨が湖上水運に深くかかわっていた様相がうかがわれる。

延喜五年の所牒による広域水面支配の意義について、勝浦玲子は、国中の水面を御厨領として国家の管理下に置くことで、「水産物採取権はもとより、それから派生する用水権・交通権を統制下

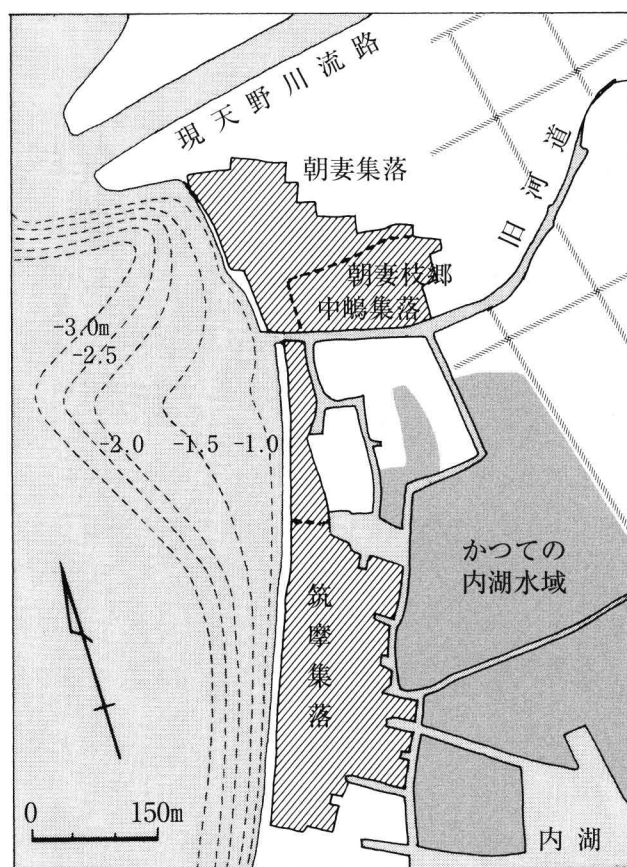


図3 朝妻港比定地付近の地形

※ベースマップは明治初期の地籍図、微地形復原は空中写真判読による。

におこうとするものであった」としている〔勝浦 1978〕。このように 10 世紀を画期として、御厨の職掌に従来の供御物の採取調製に加えて、湖上交通の統括という機能が加えられた可能性を提起しておきたい。⁽⁴⁵⁾このような仮定の下では、御厨に与えられた広域水面の特権とは、供御を名目しつつも内実は廻船上の通行権保証であったと理解される。

なお、琵琶湖の御厨においては、これら供御物の漁撈にあたった者と舟運に従事した者とおそらく別であっただろうこと、換言すれば、漁撈と廻船との分業がすでに存在していた可能性があることについて付言しておきたい。網野は、中世前期には漁撈と、廻船人・商人としての活動とはまだ未分化であったとしている〔網野 2001b : 27〕。しかし、琵琶湖の場合には、舟運に絶対的な影響を及ぼす湖上風という自然条件により、廻船業への専従性が高くなることが想像される。機械動力導入以前、湖上の広域移動には帆かけが不可欠であったが、湖陸風・山谷風が発達しやすい琵琶湖上の風向・風速は不安定で、一日のうちでも複雑に変動する〔彦根地方気象台 1993〕。特に「比良オロシ」「ハヤテ」と呼ばれる突風は予測が困難であり、しばしば遭難をもたらすものとして恐れられている〔中村 1982 ; 琵琶湖地域環境教育研究会 1999〕。このように荒れやすい湖上を長距離航行するには、一定の風待ち日数が必要であったことを帆船時代の船頭は述べている〔中村 1982 ; 出口 1997〕。

例えば湖北地方の尾上港から大津方面への航行には、風待ちしながら通常三日はかかり、往復になると約一週間、数週間かかることも珍しくなかったという〔出口 1997〕。したがってこれら帆船の船頭・水手の生活形態としては、一応の根拠地はあっても、船による移動に多くの時間が割かれることになる。また風と気象を予測する「ケシキミ」には熟練が必要であり、船頭仕事には操船とあわせて高度な技術が求められたという〔中村 1982〕。このように琵琶湖における廻船業は、地先での漁撈活動と比較すると、移動性かつ専従性のきわめて高い生業といえる⁽⁴⁶⁾。

したがって、網野が提起した「船による移動・遍歴を生活の基本とする職人的海民」像は、琵琶湖においては漁撈を主業とする贅人そのものではなく、舟運に従事した者に認められる属性であることを指摘しておきたい。古代末期以降の琵琶湖において湖上特権の付随する供御人身分を強く希求したのは、このような廻船業従事者であったと考えられる⁽⁴⁷⁾。

以上のように、古代の琵琶湖岸の御厨には、漁撈に携わる集団のみならず、高い専従性をもって廻船に従事する人々が存在したことが推測される。しかし供御物の採取にあたっていた古来の贅人は、地先水面を対象に定住的な生活を営んでおり、湖の御厨における漁撈活動自体は、農耕と結びついた複合生業型を基底としていた。したがって琵琶湖を生活の場とする「海民」のすべてを、遍歴型の「非農業民」と一括することは適切ではないと考える。

おわりに

古代の御厨における生活実態を取り出すためには、御厨の地形・気候的条件とともに、その上に展開する「生態系」、特に魚類を中心とした生物相の分析が不可欠である。本稿では、「湖沼河海」ごとに異なる御厨の環境条件とその漁撈の実態を明らかにするために、琵琶湖に設けられた筑摩御厨を対象として、古代の地形・生息魚種の生態・漁撈技術段階を照合し、その生活実態について検討した。分析の結果、古代の湖の御厨における漁撈活動は、地引網漁+築漁というきわめて定着的な漁法によるものであり、現地での生活実態としては、地先水面での漁撈と農耕が分かちがたく結びついた「漁+農」複合型の生業形態であったことが推定された。古代の湖の御厨における漁撈活動は、網野善彦が提起した「船による移動・遍歴を生活の基本とする海民」像とは、異なる実態のものであることがわかった。

以上のように、湖水に面して暮らす「海民」のすべてが遍歴の民であったわけではなく、「山野河海を生活の場とすること」自体が、即「非農業民」を意味することにはならない。網野は、農業民と「非農業民」の区別を、山野河海などの「場に対する関わり方の違い」に求めているが〔網野 1984: 29-30〕、その関わり方の相違が十分に明示されているとはいいがたい。「非農業民」概念の論証のためには、まず「山野河海」それぞれにおける生計活動・環境利用史の実態を検討することが不可欠であろう。生業を指標とした諸集団の分類・考察には、現地の環境条件に照らし合わせた生活形態の分析が前提となるのであり、このような環境利用史研究には歴史学のみならず地理学や生態学を援用した学際的手法が不可欠である。生業に関する文書史料については、それを現地の環境条件に即して読み解こうとする試みが、今後一層重要になってくるもの⁽⁴⁸⁾と考える。

古代の御厨における環境利用と贅人の生活形態に関して、今後引き続き検討せねばならないのは、

本稿で確かめられた「漁＋農」複合型の生業形態が、琵琶湖岸の御厨のみにみられる特殊な形態であったのかという点である。この問題に関しては、筑摩御厨と同じく『延喜式』に所載された御厨のうち、河内国・山城国の御厨がそれぞれ「江御厨」と呼ばれ、おそらくは「河内湖」と「巨棕池」一帯を指していたらしいことが重要となる。両者ともに止水性の湖沼であり、筑摩御厨と同様、水陸移行帯において漁撈と農耕が分かちがたく結びついた生活形態の可能性は、十分にあるものと考ええる。

ただし、これら畿内に多く認められる内水面御厨のうち、同じ淡水域であっても河川に設けられた御厨については、その生態学的環境が大きく異なる点で注意が必要である。河川に生息する漁獲対象魚種には回遊性のものが多く、生活史の各段階において異なる河川微地形を利用している。成長の各時期に応じて漁獲技術を使い分け、回遊を追って季節的移動を繰り返す生活形態では、漁撈への専従性が高くなることが予想される。事実、琵琶湖集水域でも、流入河川の中流域においては、農民から「自分たちとは異なる生活様式を持つ」と意識されている専従性の高い漁撈従事者が認められる⁽⁴⁹⁾。このように河川という生態学的環境のもとでは、網野が提起した移動・遍歴型の専門的漁民＝「非農業民」を見出しうる可能性が高い。

以上のように専門漁民の出現・生業への専従性とは、社会的分業の成熟度にのみ起因するものではなく、環境条件にも大きく規定されていると考えられる。網野が提起した特権的な「職人的海民」、すなわち専門的な漁民像も、このような現地での環境条件と照合してはじめて、その実像が解明されるのではないだろうか。

註

(1)——『類聚三代格』巻第十九，太政官符，元慶七年十月二十六日。

(2)——網野は、1982年に実施された「琵琶湖総合開発地域民俗文化財特別調査」において、筑摩御厨に関する調査報告を行っている[網野 1983]。しかし、そこで主に取り上げられたのは近世筑摩の隣村にあたる磯村であり、網野は磯村が江内湖に強固な漁業権を持っていることに注目して、筑摩御厨以来の由来を想定している。一方、近世の筑摩村は後述のように内湖の外側に広がる琵琶湖と天野川を対象に漁撈活動を行っていたのであるが、このような筑摩村自身の漁撈実態については、網野はほとんど考察対象としていない。

(3)——『類聚三代格』巻第四，太政官符，延暦十九年五月十五日。

(4)——大宝令以降の官制では、国家・役人の膳を扱う大膳職と、天皇家の家政的な食膳を調製する内膳司とが区別されているが、浄御原令の段階では、両者は「膳職」として一括されており、大膳・内膳の分置後でも大膳には多分に皇室家政的な要素が混入されたままであったと考えられている[東野 1983]。上記の筑摩御厨の大膳職

から内膳司への改隸も、国家・皇室未分化段階からの官制整備に伴うものとみられる。

(5)——『延喜式』内膳司・式部省、および『西宮記』第二巻による。

(6)——『日本三代実録』仁和元年九月七日戊子条・仁和三年六月十一日癸丑条。

(7)——贅戸とは、令制以前からの品部であり、『令集解』によれば、「調雑徭」を免じられた江人 87 戸・網引 150 戸・鵜飼 37 戸と、「雑徭」を免じられた未醬 20 戸からなり、大膳職下の雑供戸として編成されていた。

(8)——このことから、筑摩御厨は、贅戸を擁する大化前代からの畿内御厨とは起源を異にするとして、その設置を天智天皇の近江大津宮造営期に想定する説も存在する[網野 1984]。たしかに筑摩御厨長については、雑供戸として世襲制をとる他の御厨の長と比較すると、六年任期で膳部から選ばれるなど官人的性格が強いことから、「調丁との間に直接伝統的なつながりを持たない」とも説明される[勝浦 1977]。しかし、10 世紀の御厨長である息長光保、物部永邦、浅井当宗らは、いずれも筑摩近辺の坂田郡・浅井郡の古代からの有力氏族とみられ、

在地性という点からみれば、筑摩御厨長とそこで使役される調丁との間に伝統的なつながりが全くないと言い切ることはできない。そもそも筑摩御厨の置かれた天野川＝息長川流域を本拠とした息長氏については、景行天皇以来歴代の后妃を輩出しており、王権との深い関わりが知られている。これらを勘案するならば、古来より息長氏の膝下にあった筑摩御厨が、大化以前に起源を持つ可能性は残されている。

(9)——『類聚三代格』巻第十，太政官符，延喜二年三月十二日。

(10)——『扶桑略記』延久元年七月十八日条・延久二年二月十四日条。

(11)——筑摩村は明治七年（1874），朝妻村およびその枝郷中島村と合併して「朝妻筑摩村」となり，現在に至っているが，近世の筑摩村と朝妻村は『寛永石高帳』『天保石高帳』では個別に高付けされており，本来は独立した村々であったと考えられる。

(12)——「近江なる筑摩の祭とくせなん つれなき人の鍋の数見む」

(13)——『今昔物語集』巻第十五「近江国坂田郡女，往生語第五十三」に「…其ノ国ノ内ニ，筑摩ト云フ所有リ。其ノ所ニ江有リ。其ノ江ニ蓮花生タリケリ。」とある。

(14)——近世の入江内湖は「磯内湖」と呼ばれ，筑摩村南方にある磯村が内湖の漁業権をほぼ独占していた。磯村の村域は，内湖岸の三分の二を占めており，近世以降の入江内湖においては筑摩の村域である部分はわずかにすぎず，「つくまの沼」と呼ぶには実体が伴わない感がある。

(15)——この木簡は書式・形状からみて筑摩からの贅に直接添えられた付札木簡ではなく，京においてその保管用に新たに付された付札木簡と考えられている〔米原町史編さん委員会 2002：297-199〕。また別に平城京東院地区からは，「二筑麻醬□ 御贅三□六升」と記した八世紀の木簡も出土しており，この時点でやはり筑摩から「御贅」が貢進されていたことが注目される。鬼頭〔1983〕によれば東院とは離宮ないし東宮の所在地と考えられており，天皇や東宮への供御に供される御贅が，八世紀前半段階で筑摩から貢進されていたことは間違いない。

(16)——滋賀県下のフナ漁獲高を，地域別（郡単位）に集計した『明治38年滋賀県統計全書』によれば，筑摩村の属する坂田郡のフナ漁獲高は8,462貫で，野洲郡の8,475貫に次いで県下第二位となっている。この大部分は，入江内湖で産卵期に捕獲されたものである。

(17)——小林義兄『湖魚考』（彦根市立図書館蔵）文化三年（1806）撰。藤居重啓『湖中産物図証』（滋賀県立図書館蔵）文化十一年（1814）撰。

(18)——『当流節用料理大全』正徳四年（1714）。奥野純『湖魚譜』安政五年（1858）撰。

(19)——巻第十五「義孝の少将，往生せる語 第四十二」

(20)——大島・奥津島神社文書「神主職規文」弘安六年（1283）に「定種々規文」として「一，鮓切魚御酒，両神主二斗」とあり，鮓切祭をさすものと考えられている〔高橋 1987〕。

(21)——元暦元年（1184）の官宣旨によって賀茂社領安曇河御厨に以前からの「引網」が保護されている（『平安遺文』）。

(22)——明治十六～二十二年頃の作成とみられる『近江水産図譜 漁具之部』（滋賀県水産試験場蔵）の記載による。

(23)——西之切神田神社文書「江洲諸浦東西大綱引場上中下覚」〔喜多村 1942〕による。

(24)——朝妻木村家文書「筑摩村大綱御運上場所へ朝妻村より土表いたし申候儀に付指上手形」万治二年三月七日。

(25)——国土地理院発行昭和36年測量の『湖沼図』「長浜2」「彦根・多景島2」所載の底質分布図による。

(26)——加えて，詳細に見れば近江の遡河型アユには二類型があり，春期遡上群のみならず夏期の遡上群（5～7月）が存在しており〔塚本 1988〕，そのため近江では3月～7月の長期にわたって上り築の操業が可能であったことも大きい。

(27)——滋賀県庁所蔵行政文書。なおこの調査では，築の漁獲はその操業期間によって「春期」と「秋期」とに分けられており，「春期」は遡上アユが主対象であるが，「秋期」は琵琶湖から遡上するビワマスをねらう下流域の上り築，及び落ち鮎を対象とする中流域の下り築を指しているものと考えられる。

(28)——『経俊卿記』正嘉元年六月十五日条。

(29)——『近江坂田郡志』巻七所収朝妻木村家文書「修理亮国景売券」。

(30)——上多良村口家文書。

(31)——坂田郡条里の復原案は，服部昌之（1983）の成果によった。

(32)——元応元年（1319）の『日吉社領注進記』によれば，筑摩十六条は「二宮十禅師大行事三社長日御供料所」として，元暦年中に後白河院が寄進したと伝えるが，元仁元年（1224）に日吉社十禅師宮礼拝講の料所として延暦寺領富永荘の百石が充てられていることから，富永荘の

一部が割かれてできたものと考えられる。なお、筑摩村の浜堤上の集落部分の小字地名が「富永」であることも、筑摩と富永荘の関係を示唆するものと推測される。

(33)——『賦引付』文明十四年十二月十一日条。

(34)——上多良村口家文書。上多良西川文書「天野川築場古書写并文化度書付共」文化十三年（1816）。

(35)——なお「冬所釣海浦」については、上賀茂神社の「安曇川献進祭」に進められる魚種が古くはすべてコイであったように（北船木区有文書）、コイを主要対象とする釣漁を指すと考えられる。琵琶湖におけるコイ釣りは水深 12m 内外において行われた〔水産庁漁政部漁業調整第二課 1951〕。

(36)——上り築が定置漁法であることはもちろん、地引網についても、外洋のものも含めて、「魚族の接岸を待つ消極的な漁法」と定義されていることは看過できない〔日本地誌研究所 1989：278〕。

(37)——明治初期まで、大地引網の操業が可能な水深は、10 尋（＝18m）以内に限られていた（『近江水産図譜 漁具之部』滋賀県水産試験場蔵）。後述の堅田の小糸網によるフナ漁でも、明治期までは水深 25m 内外での操業が限界であった〔伊賀 1954〕。

(38)——安曇河御厨についても安曇川河口付近に近世初期まで「さかのえりの江海」と称する内湖があり、天保年間に新田開発されるまでは「江海年貢二石五斗」が課せられていたように（北船木区有文書）、フナの産卵地を擁した好漁場であった点は同様である。

(39)——外洋の地引網についても、近世の和泉国佐野浦や紀州漁民のように関東あるいは対馬・五島まで出漁する移動漁民集団ばかりではなく、河岡〔1983〕の指摘するように、農閑期に地先水面のみで操業する半農半漁的村落が多数を占めていたことは看過できないであろう。

(40)——明治期までの琵琶湖漁法の大部分は、水深 18m 以浅を漁場としていたが〔滋賀県水産試験場 1915〕、堅田の小糸網は水深 25m 内外で操業が可能であり、また延縄漁では、ビワマスは水深 60m、ウナギは同 30m の地点で操業が可能であった〔水産庁漁政部漁業調整第

二課 1951〕。

(41)——網野〔2001a〕は中世の琵琶湖について、ひとり堅田のみでなく、船木・菅浦・栗津橋本供御人ら特権的漁撈集団が競合していたとするが、その考察には本稿であげた漁法の相違に基づく水深別の利用可能面積の観点は抜け落ちている。琵琶湖水面の多くを占める水深 25m 以上の深水域における操業は、堅田に独占されていたのであり、湖面の利用面積の点では堅田が圧倒的であったことは看過できないと筆者は考える。この問題については別稿にて検討を予定している。

(42)——例えば中世の琵琶湖岸の菅浦供御人についても、5 戸の漁人が鯉の貢上に加えて、小麦を貢進している事実があり、漁撈と農耕の複合形態を指摘することができる（菅浦文書）。

(43)——『山槐記』応保元年（1161）九月十七日条。

(44)——「勢多津」の所見は『正倉院文書』造石山寺所関連史料、天平宝字六年（762）造東大寺司牒。「和邇船瀬」については貞観九年（867）4 月 17 日太政官符（『類聚三代格』）に、承和年中（834-848）に建造されたことがみえる。

(45)——御厨の当初の職掌が「御贄の集荷場」であったことを勘案すれば〔白木 1988〕、流通拠点としての港津の管理が御厨職掌に包括されたことは不自然ではない。先述の大江御厨に認められた「国中池河津」の支配権も、この管掌の確立にかかわって理解されるべきと考える。

(46)——琵琶湖の丸子船について民俗学的調査を行った出口晶子〔1997〕も、船頭の湖上ネットワークの広域性に注目しており、廻船の船頭が漁師から「異質な存在」と認識されている様相を明らかにしている。

(47)——在家 72 字のうち漁人五字にすぎない菅浦庄が、13 世紀に供御人身分を獲得しようとしたのも、このような事情によるものと推測される。

(48)——この意味で春田直紀の近年の研究〔2002〕は注目される成果である。

(49)——長良川流域においても、同様の事例が報告されている〔野中 1991〕。

引用文献

- 網野善彦 1983. ムラの歴史—筑摩御厨と磯村の変遷を中心として—, 滋賀県教育委員会『湖南の漁撈生活』573-582.
- 網野善彦 1984. 『日本中世の非農業民と天皇』岩波書店.
- 網野善彦 2001a. 『日本中世都市の世界』筑摩書房.
- 網野善彦 2001b. 『中世民衆の生業と技術』東京大学出版会.
- 伊賀敏郎 1954. 『滋賀県漁業史 上 (概説)』滋賀県漁業協同組合連合会.
- 内山純蔵・中島経夫 1998. 動物遺存体Ⅱ (浚渫 A 調査区), 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書 2 赤野井湾遺跡 第4分冊』28-45.
- 梅村 喬 1981. 律令財政と天皇祭祀—調と贄をめぐる—, 日本史研究 235 : 5-25.
- 勝浦令子 1977. 律令制下贄貢納の変遷, 日本歴史 352 : 19-42.
- 勝浦令子 1978. 古代における禁猟区政策—供御江を中心として—, 井上光貞博士還暦記念会編『古代史論叢 下巻』165-193. 吉川弘文館.
- 角野康郎 1989. 『滋賀の水草・図解ハンドブック』新学社.
- 河岡武春 1983. 黒潮の海人, 日本民俗文化大系『山民と海人』363-393. 小学館.
- 川那部浩哉・水野信彦 1989. 『日本の淡水魚』山と溪谷社.
- 喜多村俊夫 1942. 『江洲堅田漁業史料』アチックミュージアム.
- 鬼頭清明 1983. 贄貢進についての再検討, 奈良国立文化財研究所創立 30 周年記念論文集刊行会『文化財論叢』501-518.
- 草津市教育委員会 1978. 『草津市文化財調査報告書 (1) 鮒寿司切りの神事』.
- 桜井信也 2002. 日本古代の鮓 (鮒), 続日本紀研究 339 : 19-38.
- 佐野静代 2003. 琵琶湖岸内湖周辺地域における伝統的環境利用システムとその崩壊, 地理学評論 76-1 : 19-43.
- 滋賀県水産試験場 1915. 『琵琶湖水産調査報告第三巻』.
- 滋賀の食事文化研究会 1995. 『ふなずしの謎』サンライズ出版.
- 滋賀の食事文化研究会 2003. 『湖魚と近江の暮らし』サンライズ出版.
- 滋賀民俗学会 1974. 『野洲川下流域の民俗』滋賀民俗学会.
- 白木一好 1988. 御厨小考, 『日本古代史論輯』314-334. 桜楓社.
- 水産庁漁政部漁業調整第二課 1951. 『滋賀県漁具譜』.
- 高橋昌明 1987. 『湖の国の中世史』平凡社.
- 塚本勝巳 1988. アユの回遊メカニズムと行動特性, 上野彌彌・沖山宗雄編『現代の魚類学』100-133. 朝倉書店.
- 出口晶子 1997. 『舟景の民俗—水辺のモノグラフィ—琵琶湖—』雄山閣出版.
- 東野治之 1983. 『日本古代木簡の研究』塙書房.
- 中村芳三 1982. 『湖のくらし—塩津浜逸話集—』現代創造社.
- 奈良国立文化財研究所 1995. 『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』奈良県教育委員会.
- 西岡虎之助 1953. 『莊園史の研究 上巻』岩波書店.
- 日本学士院・日本科学史刊行会 1959. 『明治前日本漁業技術史』日本学術振興会.
- 日本地誌研究所 1989. 『地理学辞典』二宮書店.
- 農商務省水産局 1910. 『日本水産捕撈誌 下巻』.
- 野中健一 1991. 長良川流域における淡水魚介類の漁撈と食用, 地理学評論 64A-4 : 244-264.
- 橋本道範 2001. 中世における琵琶湖漁撈の実態とその歴史的意義—湖辺エコトーンの漁撈を中心に—, 月刊地球 23-6 : 413-417.
- 服部昌之 1983. 『律令国家の歴史地理学的研究』大明堂.
- 春田直紀 2002. 自然と人の関係史—漁撈がとり結ぶ関係に注目して—, 国立歴史民俗博物館研究報告第 97 集 : 223-235.
- 彦根地方気象台 1993. 『滋賀県の気象』.
- 琵琶湖地域環境教育研究会 1999. 『ビワコダス：湖国の風を探る—生活と科学の接点としての気象研究の試み—』滋賀県立琵琶湖博物館.
- 琵琶湖博物館 1998. 『水がはぐくむ生命 琵琶湖と魚と人間—東アジア的世界のなかで—』.
- 祝宮 静 1937. 『近江国野洲川築漁業史料』アチックミュージアム.
- 米原町教育委員会 1986. 『筑摩湖岸遺跡発掘調査報告書』.
- 米原町史編さん委員会 1999. 『米原町史 資料編』米原町役場.
- 米原町史編さん委員会 2002. 『米原町史 通史編』米原町役場.

-
- 三浦泰蔵 1971. 琵琶湖の魚類. 琵琶湖国定公園学術調査団『琵琶湖国定公園学術調査報告書』313-330.
- 三浦泰蔵・須永哲雄ほか 1966. 魚類—魚類班中間報告一. 『びわ湖生物資源調査団中間報告（一般調査の部）』711-906. 近畿地方建設局.
- 宮地伝三郎・川那部浩哉・水野信彦 1963. 『原色日本淡水魚類図鑑』保育社.
- 安室 知 1990. エリをめぐる民俗①—琵琶湖のエリ—後篇. 横須賀市人文博物館研究報告（人文）35：31-57.

（滋賀大学，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2005年11月14日受理，2006年8月10日審査終了）

The Natural Environment and Fishing Activities of Mikuriya in Chikuma, Omi Province : An Environmental History of Lakeside Mikuriya

SANO Shizuyo

A study of the natural environment surrounding various mikuriya (originally cooking structures used to prepare offerings to the Emperor or deities) on the shores of lakes, rivers and the sea is indispensable when shedding light on fishing activities that took place in mikuriya from the Ancient period. In addition to topographical and climatic conditions, a study of the natural environment also includes an examination of eco-systems that developed at these sites, especially biota, with a focus on fish. Since fish ecology and its behavior (eating habits, use of places, etc) can be studied retrospectively for the Ancient period, it is possible to extrapolate fishing seasons and the principles behind the catching methods adopted for each type of fish by cross-checking the topography of the time with fishing technique stages. If this clarifies the fishing methods used at each mikuriya, a picture should emerge of fishing activities at each waterside mikuriya and differences in the lifestyles of fishermen.

This paper examines the way of life in the Ancient period by cross matching the topography, the ecology of populations of fish species and the stage of fishing techniques of the time for Chikuma mikuriya erected on Lake Biwa in the Ancient period. This study revealed that Chikuma mikuriya caught crucian carp, which gathered alongside the lakeshore during the spring spawning period, and ayu, which swam from Lake Biwa up rivers flowing into the lake from spring to early summer. It also found that fishermen caught fish using a combination of dragline fishing from the site water surface and fish traps, which were extremely well established fishing techniques. As for the type of lifestyle of the people living in these mikuriya, it is surmised that they used resources of the littoral zone, leading a way of life that combined fishing and agriculture in which it was difficult to separate fishing from farming. It is difficult to find any trace of fishing people who specialized in fishing and only honed methods of catching fish. This differs from Yoshihiko Amino's portrayal of fishing people from the Ancient period, according to which "they were people who moved by boat and led an itinerant lifestyle." When studying groups to find what occupations they engaged in it is essential to validate the environmental conditions of their locations. Consequently, this perspective should be adopted for a re-examination of the concept of "non farming people" as proposed by Amino.